古文を読むために　5

助詞は助動詞と違って、現代語と共通するものも多い。現代語と同じものは注意を払う必要がない。したがって、古文の助詞の学習はポイントをしっかり押さえて、必要なものだけを重点的に学んでおけばよいだろう。その中で、係助詞は古文特有のものであるが、これに関わる「係り結び」は比較的初期の段階で学習しているだろうから、確認程度で済ませることができる。このくらいになると紛らわしい語の識別などを頭に入れながら、今まで学習した文法的知識を整理して、体系づけていけるとよい。

1 助詞

活用のない付属語を助詞という。多くの助詞は一音節か二音節のものであって、「が・の・を・に・へ・と・ば・て・ど・で・し・は・も・ぞ・や・か・な・そ・よ・にて・して・より・から・とも・ども・つつ・だに・すら・さへ・のみ・まで・など・しも・なむ・こそ・ばや・がな・かな・かも・かし」がある。ちなみに三音節のものは「ながら・ものの・ものを・ばかり・てしが・にしが・もがな」、四音節のものは「ものから・ものゆゑ・てしがな・にしがな」がある。助詞は語としては小さいが、文法的な表現では重要な働きを果たし、この語一つで意味が全く正反対になることもある。助詞はその働きによって六種類に分けるのが一般的である。これは山田孝雄の説によるものである。

助詞を身につけるには、まず、数の少ない係助詞・副助詞・間投助詞は暗記してしまうのがよい。次に主に体言や準体言に付くのが格助詞。そして活用語に付くのが接続助詞（「ながら」だけは体言にも付く）、さらに、文末に来るのが終助詞という区別がある。

◎語と語、文節と文節の関係を表すもの

●格助詞　語と語、特に名詞（または体言相当語）と動詞とを結び付けて、その関係を表すことをその役割とする。「格」とは、体言が同じ文中の他の語に対して持つ関係のことである。「格」には次の四種類がある。

1　主格（主語となる資格を表す）
2　連体修飾格（体言を修飾する資格を表す）
3　連用修飾格（用言を修飾する資格を表す）
4　同格（上と下が同等である資格を表す）

特に、連用修飾格になる場合、動詞の意味と関連しつつそれぞれに働きを持つことになる。例えば場所・時間を表したり、動作の対象を表したりする。それぞれの助詞により特定の用法があるので、丹念に辞書や文法書を読みながら確認するとよい。

●接続助詞　活用語に付いて、後に続く述語と、順接または逆接、あるいは単なる接続、といった関係のあり方を表す。接続助詞は接続の仕方によって次の五種類に分類することができる。

1　順接の仮定条件
2　順接の確定条件
3　逆接の仮定条件
4　逆接の確定条件
5　打消接続

この中で、注意を要するものがいくつかある。まず「ば」は未

然形に接続する場合は1となり、已然形に接続する場合は2となる。したがって、何形に接続しているかを正確に見分ける必要がある。次に打消接続の「で」（未然形接続）だが、これはもともとは打消の助動詞「ず」の連用形に接続助詞の「て」の付いた「ずて」が一音化したもので、「ナイデ」と現代語訳することができる。動詞が音便化したものに付く「て」が濁音化した打消の意味を含まない「で」（連用形接続）と紛らわしいことがある。三番目に「が」「を」「に」の中には格助詞と区別が付きにくいものがある。この例に限ったことではないが、助詞の意味・用法を一つ一つ機械的に暗記するのではなく、前後の文節や文の意味内容と関連させて理解するようにしていけば、徐々に見分けが付くようになることに気づかせるとよい。

◎文にさまざまな意味を添えるもの

●副助詞　種々の語に付いてそれに、限定・程度・添加・例示・類推・強意などの意味を添えるものである。「だに」「すら」「さへ」は訳語とともに覚えておくのが便利である。

だに　…セメテ…ダケデモ（最小限の限定）、…デサエ（類推）
すら　…デサエ（類推）
さへ　…マデ〈モ〉（添加）

特に「さへ」を「サエ」と訳すと文意が変わってしまう場合が生じるので注意が必要である。

●係助詞　種々の語に付いてそれに、強意・疑問・反語などの意味を添えるものである。古文に特有の助詞である。「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」によって引き起こされる「係り結び」こそ、古文を特徴づけるともいうことができる。しかし、この「係り結び」も鎌倉時代の頃から連体形が終止形の働きを持つようになり、連体形の持つ意味が希薄になったことから、「係り結び」が持っていた価値がなくなり、衰えてしまったのであった。係助詞「は」「も」は意味の上から係助詞に分類する。つまり、この助詞を含む文節が、文の述語と係わる点がポイントとなる。「は」と「が」は特に同じように用いる感じがするが、例えば「勉強はしたい」という時に「は」は主格を表すのではないことが「が」と用法が異なる大きな点である。しかし、「は」「も」を用いた文は終止形で終止し、係り結びは成立しない。「は」が格助詞「を」の下に付くと、「をば」と濁音化する。接続助詞の「ば」と混同しないようにしたい。また、「も」に係助詞の「ぞ」「こそ」が付いた「もぞ」「もこそ」という形は「…すると困る・…したら大変だ」という不安や心配を表す言い方となる。

●終助詞　種々の語に付いてそれに、禁止・願望・詠嘆・念押しの意を添えて文を終わらせる働きを持つ。原則的には文末に置かれるが、引用を導く格助詞（「と」「とて」）や副助詞（「など」）の上でも文が終止している場合があり、その時にはその位置に終助詞が置かれることもあるので注意する。

●間投助詞　文節末に付いて、詠嘆・強意・呼びかけの意味を担う。終助詞と間投助詞の区別は容易ではない。文中の文節末に付く場合は間投助詞と考えられるが、文末に付いた時には区別しにくい。「を」「や」「よ」が間投助詞であると覚えて対応するしかない。

2 注意すべき言葉遣い

◎副詞の呼応

副詞の用法の中で、修飾される文節に、打消・推量・疑問・反語・仮定・願望・当然・禁止・比況などを表す語を要求し、その叙述と呼応する場合である。このような用法を持つ副詞を陳述の副詞（あるいは呼応の副詞・叙述の副詞）と呼ぶ。

打消と呼応するもの　あへて　いさ　いまだ　え
必ずしも　さらに　たえて　つゆ
よも　をさをさ

推量と呼応するもの　あるいは　いかばかり　おそらく
けだし　さだめて　むべ

疑問と呼応するもの　いかで　いかに　なぞ　など
なにゆゑ　なんぞ

反語と呼応するもの　あに　いかが　いかで　いはんや
など

仮定と呼応するもの　たとひ　もし　よし

願望と呼応するもの　いかで　なにとぞ　願はくは

当然と呼応するもの　すべからく　まさに　よろしく

禁止と呼応するもの　な　ゆめ　ゆめゆめ

比況と呼応するもの　あたかも　さながら

このような陳述の副詞の中で、疑問・反語を表すものがある時には、文末が連体形となる。係り結びとも関連する場合があり、分かりにくいものもあるので、頭に入れておくとよい。

◎形容詞・形容動詞の主な語幹用法

形容詞・形容動詞の語幹には次のような特別な用法がある。これは動詞の語幹よりも独立性が高いためであると考えられている。形容詞のシク活用の場合は、ここでいう語幹とは終止形の形をいうので注意が必要である。

- 単独で用いられて感動表現になる。多くは上に感動詞を伴っている。
- 格助詞「の」が付いて、連体修飾語になる。これも感動的な表現となる。
- 「形容詞の語幹＋み（接尾語）」で、原因・理由を表す連用修飾語になる。多くは上に「体言＋を」を伴い、全体で「（体言）が…ので」という意味になる。
- 接尾語が付いて、他の品詞となる。

「さ」「み」が付いて名詞となる。

「がる」が付いて動詞となる。

形容詞の場合「げ」が付いて形容動詞となる。

（畠山　俊）